GM 鶴牧-3 環の会

第 16 回クラシックを楽しむ会

2014 年 11 月 23 日（日）18:30～21:30

歌劇「セビリャの理髪師」（ロッシーニ）

会場等：グラインドボーン 1981 年 8 月 17 日※
※テレビ放映用の上演
楽団等：ロンドン・フィルハーモニック管弦楽団
グラインドボーン合唱団
指揮　：シルヴァン・カンブルラン
演出　：ジョン・コックス
出演　：フィガロ：ジョン・ローンズリー
アルマヴィーヴァ伯爵：
マックス=ルネ・コソッティ
ロジーナ：マリア・ユーイング
バルトロ：クラウディオ・デスデリ
バジリオ：フェルッチョ・フルラネット
ベルタ：キャサリン・マコード
その他

第 1 幕第 2 場。左からロジーナ、伯爵、フィガロ、バルトロ

あらすじ

医師バルトロは姪ロジーナの後見人で、ロジーナの財産目当てに結婚を目論んでいる。一方、ロジーナを恋するアルマヴィーヴァ伯爵は、理髪師フィガロの助けを借りて嫉妬深いバルトロの目をかいくぐり、ロジーナに思いを伝え、二人の恋を成就させるラブコメディ。

ロッシーニについて

この歌劇の後日談となるモーツァルトの「フィガロの結婚」とともに「セビリャの理髪師」はオペラブッファの最高傑作。この歌劇をわずか 13 日間で作曲したロッシーニは、モーツァルトの死の翌年 1792 年生まれ。オペラの歴史に輝くイタリアの作曲家で 19 世紀前半に活躍し一世を風靡した。しかし 19 世紀半ばのヴェルディ、ワーグナーの時代になると「セビリャの理髪師」以外の作品は忘れられ、100 年後の 1970 年代になって再評価が進んだ。

名曲聴きどころ

「序曲」は単独でもしばしば演奏される名曲。理髪師フィガロが登場して歌う**「私は町の何でも屋」**、アルマヴィーヴァ伯爵がフィガロのギター伴奏で歌う**「私の名が知りたければ」**、ロジーナがリンドーロへの愛を誓って歌う**「今の歌声は」**、音楽教師バジリオがアルマヴィーヴァ伯爵を醜聞で追い出そうと歌う**「陰口はそよ風のように」**など、聴きどころ満載。

第 17 回クラシックを楽しむ会（予告）

タイトル：**喜歌劇「こうもり」（R.シュトラウス）**
12 月 28 日（日）18 時開場、18 時 30 分上映開始
1983 年プラシド・ドミンゴ指揮、コヴェント・ガーデン王立歌劇場管弦楽団。名歌手キリ・テ・カナワとヘルマン・プライそれにシャンソン歌手シャルル・アズナヴールが出演。
新年 1 月は予定。

【時と場所】

時の指定はないが 18 世紀、場所はスペイン南部のセビリャ。

あらすじ

【第1幕】第 1 場　バルトロ邸バルコニー下の小広場、夜明け近く

若くして親から莫大な遺産を継いだロジーナは、後見人である叔父バルトロの家に身を寄せている。一方バルトロは、ロジーナと結婚できれば美女と財産を一気に手に入れることができると目論んで、他の男が言い寄らないように監視している。スペインの貴族アルマヴィーヴァ伯爵はロジーナを見そめて、窓の下からセレナードを歌うが、バルトロの監視が厳しく二人は会うことができない。そこに「セヴィリャの理髪師」ことフィガロが通りかかり、伯爵は、報酬をはずむから協力するよう依頼する。そのとき、ロジーナは窓からこっそり「身分と名前を教えて」というメモを落とす。伯爵は彼女の誠実な気持ちを試すため、貧しい学生リンドーロと名乗ることにする。

【第1幕】第 2 場　バルトロ邸の一室

理髪師としてバルトロ邸に入り込んだフィガロは、ロジーナにリンドーロ宛の手紙を書くように勧めるが、彼女はすでに書き終えていて、それをフィガロに託す。その後で、伯爵が酔っぱらった騎兵の扮装でバルトロ邸にやって来てロジーナと話をしようとするが、この作戦はバルトロに怪しまれて失敗。

【第2幕】第 1 場　バルトロ邸の書斎

伯爵は、今度はバルトロの腹心である音楽教師バジリオの「弟子」に変装。しかし、それでもバルトロに怪しまれたので、仕方なくロジーナが書いたリンドーロ宛の手紙を、伯爵の手から盗んだと言って渡し、味方だと思い込ませる。

伯爵とロジーナが音楽のレッスンをしている間に、二人で今夜駆け落ちすることを約束する。このときフィガロは、バルトロの髭を剃りながら、バルコニーの鍵を手に入れる。

【第2幕】第 2 場　バルトロ邸の一室、その日の夜

伯爵とフィガロが去ったあと、バルトロはロジーナに例の手紙を見せ、リンドーロはお前を伯爵に売ろうとしていると言う。怒ったロジーナはバルトロとでも誰とでも結婚すると言い出す。喜んだバルトロはすぐに結婚しようと公証人を呼びにやる。

伯爵とフィガロがバルコニーから忍び込むと、ロジーナは怒っている。伯爵が身分を明かすとロジーナは大喜び。そこにバルトロが呼んでおいた公証人がやって来たので、その場で二人は結婚してしまう。バルトロが現れたときはすでに時遅し。それでも伯爵がロジーナの財産はいらないと言ったので、バルトロも仕方なしに二人の結婚を承諾。すべて円満に解決して幕となる。

小学館 DVD BOOK「魅惑のオペラ」第 9 巻から

原作者ボーマルシェ（1732～99）について

ボーマルシェ（ナティエ画）
コメディ・フランセーズ博物館

フランスの劇作家。時計師、音楽教師、宮廷人、企業家、金融家、出版屋、武器商、土木工事請負人などの職業に従事したほか、訴訟に明け暮れ、入獄、亡命なども経験。多才で波乱万丈の生涯を送った。

彼の作品と登場人物を理解するのに、ルイ 15 世、16 世時代の、以下のエピソードが参考になる。もちろん主人公フィガロは彼の分身である。

・13 歳で父の時計工房に入り、21 歳の時、時計の時を正しく刻む機構「脱進機」を発明。宮廷御用時計工になる。

・この間、年上の若い女性たちにちやほやされ不安定な思春期を送る。
　※「フィガロの結婚」の小姓のケルビーノを連想。

・王の食卓係大膳部官と知り合い、職を買って宮廷に入り、彼の死後はその未亡人と結婚。

・若い彼の魅力は宮廷の女性達のあこがれの的。ハープの腕を生かしてルイ 15 世の 4 人の姫達の音楽教師となる。
　※「セビリャの理髪師」の音楽教師バジリオを連想。

・財務官が、姫達が信頼する彼に相談を持ちかけて王を動かせたことから、彼に全幅の信頼と感謝。
　※「セビリャの理髪師」のアルマヴィーヴァ伯爵を連想。

・財務官は彼の強力な後ろ盾となったことから、資金を蓄えて貴族の肩書を得て司法官にもなる。

・恩人の財務官が死に、遺産相続人の伯爵から彼を誹謗・中傷する噂をまき散らされ、痛手を蒙る。
　※「セビリャの理髪師」の音楽教師バジリオの歌う「陰口はそよ風のように」を連想。

・訴訟合戦の合間に「セビリャの理髪師」を完成。コメディ・フランセーズ上演候補となる。

・女優との情事で彼女のパトロン公爵と派手な喧嘩沙汰になり入牢。敗訴して路頭に迷う寸前。

・遺産相続人との控訴審判事に反撃するため訴訟の経過を四つの「覚書」にして公開。時代の寵児に。

・社交界の名だたる夫人たちはこの「覚書」に熱中し彼の味方になる。

・裁判が終わり彼は凱旋将軍のように大衆から迎えられ、王の外戚大公は彼のために祝宴を催した。

このような経過の後も、ルイ 15 世、ルイ 16 世の密使として各国を渉って冒険。フランスの植民地がイギリスに奪われて屈辱を強いられている中、アメリカの独立運動支援で金儲けを目論み、フランス政府の支援の下、アメリカに莫大な軍事物資を送ったが、期待していた見返りがなく茫然自失。

ボーマルシェについて特筆すべき事項を二点あげる。

・「セビリャの理髪師」上演を巡って、劇作家の著作権を守るためコメディ・フランセーズの役者達と争い、**「劇作家協会」**を誕生させて、歴史的な著作権の権利公認を勝ち取る。

・ヴォルテールの遺志を継ぎ、フランスで発禁処分を受けている作品を含め、国境近くのドイツに出版社を設立して、**「ヴォルテール全集」**を発刊。

以上がフランス革命前までの、波乱万丈のボーマルシェ半生の主なエピソードである。この後も「フィガロの結婚」の完成とルイ 16 世による上演禁止に対する抵抗、フランス革命後の恐怖政治のなかで九死に一生を得て亡命するなど、彼の波乱万丈のエピソードは枚挙にいとまがない。

なお、思想的、文学的な背景については別の機会に譲る。

ロッシーニのオペラについての補足

「セビリャの理髪師」の序曲やバジリオのアリア「陰口はそよ風のように」など、ロッシーニの楽曲を特徴づけている独特のクレッシェンド（次第に強く）を**「ロッシーニ・クレッシェンド」**と呼ぶ。初めはゆっくり、小音量で始まり、早いリズムの短いフレーズをしつこく繰り返しながらだんだん色々な楽器群が同じ音型で加わって行き、オーケストラの全楽器がフォルテシモになるまで繰り返して、曲を盛り上げる。

カストラートが活躍したロッシーニ以前のイタリアの伝統的な歌唱法、装飾的で技巧的な**「ベルカント」**をロッシーニが極限まで開花させた。彼が目指したのは「自然で美しい声」「声域の高低にわたって均質な声質」「注意深い訓練によって、高度に華麗な音楽を苦もなく発声できること」にあり、知識として教えられるというよりは、最高のイタリア人歌手の歌唱を聴くことではじめて吸収・理解しうる名人芸であるとされていた。